

新しい歌を主に向かって歌え

それほど長くはないので、まず96編を朗読してみよう。この詩は98編と並び、「新しい歌を主に向かって歌え」で始まる。元旦礼拝、新年礼拝において「交読文」で取り上げられる歌でもあり、98編の1節にあるようにまさに感動的な「賛歌」(mizmōwr)である。信仰とは旧来信じてきた神を具体的な環境で常に「新しく」信じ、告白・神賛美をすることであろう。コロナウイルス感染が流行して3年半、このような状況の中で私たちはどのような新しい歌を、しかも、常に、主に向かって歌ってきたであろうか？パンデミックを生きる教会員を励ますために始めた詩編の学びが96編まで来た！コロナの感染を避けるために、40分に短縮化した主日礼拝で、Nさんが「交読文」を削るのは止めて欲しいと牧師に願い出たとか！すぐ次週から再び「交読文」を再開した。思い起こせば、「交読文」どころか一切の讚美歌歌唱、主の祈りなど説教以外の発話を辞めた教会も多かったのである。（ある教会で「手話」の導入の可能性を示唆してもみた）このようにして「交読文」はただ1回中止され、すぐ再開された。牧師家族、執事たちだけを交えた礼拝が4回あり、の中の1週を除いて「主の晩餐」も細心の注意をもって途切れることなく行われてきた。そのような経験の中で、「交読文」を私たちはどのような「新しさ」で噛みしめ、喜んでいるのだろうか？

新しくて古い、古くて新しい教会の礼拝のあり方もいつも考え続けて行きたいものである。詩96編は雄大な構想で、Yahweh に向かって「全地」の証人の中で賛歌を歌い、「異邦人」にも参加を呼びかけ、賛美は全被造世界を包括している。「世界は固く据えられ、決して揺らぐことのない！」慰めに満ちた力強い告白である。また、主は常に「到来する神」であり(13節)、世界を正(義)しく裁き、真実をもって諸国の民を裁かれる。ハレルヤー！

1. 全世界に、主なる神への賛美を、しかも新しい歌を歌うことを呼び掛ける（1節）

「新しい歌を主に向かって歌え、全地よ。」全地・全世界に向かって、新しい歌を主に向かって歌うことを勧める。捕囚からの帰還かあるいは新年の喜びからか、全世界が主なる神賛美の範囲である。

2. 「主に向かい歌い、御名をたたえよ。日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。(2節) Yahweh を繰り返さず、レトリックでもあるが、「御名」(関わり、自己啓示の神)と「彼の救い」と言い換えられ、神賛美への招きを盛り上げている。「日から日へと」とは一日中、そして、毎日継続的という意味の慣用句である。Day by dayである。彼の救いを「告げよ」の「バーサル」とは「よい知らせを受け取って喜べ、告げよ」という福音宣教の告知であり、イザヤ40:9「高い山に登れ/良い知らせをシオンに告げる者よ。力を振るって声をあげよ/良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな/ユダの町々に告げよ。」を思い起させる。イザヤでは呼び掛けはユダ、シオンの丘、エルサレムであったが、ここ詩編96編では「全地」への呼び掛けである。

3. 国々に主の栄光を、主なる神の驚くべきみ業を語り伝えよ（3節）

あらゆる異邦人たちに、彼の栄光(カーボード)を、彼の驚くべきみ業をあらゆる人々の間で宣言せよ。ここでは「国々」(異邦人たち)と「諸人民」が並んで登場してくる。イスラエルを含む全世界、異邦人を包括する全ての国々が視野に入っている。バプテストは世界伝道といい、世界祈祷週間を推進してはいるが、どれほどの意識的な祈りと行動において取り組んでいるのだろうか？

4. 主は大いなる神（4-6節） -

「大いなる主、大いに賛美される主/神々を超えて、最も畏るべき方。」なぜ賛美を呼び掛けるのか？なぜならYahwehは偉大であり、称えられるべきであるから。彼こそあらゆる神々の上におられる偉大

で恐れられるべきお方である。諸国の神々はすべてむなしい。主は諸天を造られ、御前には栄光と輝きがあり、聖所には力と光輝がある。」「空しいもの」＝「偶像」であり、Yahweh は諸天を造られた「創造主」である。そのみ前には誉れ（カーボード）と威厳・威光があり、「彼の聖所には力と美がある。」荘厳で美しい形容が並んでおり、神は正義であり、愛であると同時に宗教美術・音楽にあるように、荘厳で「美しい」ものである。東福岡教会の礼拝は美しいものであろうか？

5. 諸国の民への呼び掛け（7-9 節）

7 節：与えよ Yahweh に、お前たち民の親族たちよ。与えよ、Yahweh に栄光と力を！前半は何を与えるのかが書かれていないので、自分たち自身を与えよという意味であり、「主に帰せよ」という新共同訳はまさにそのままの事態を翻訳していると言えよう。

8 節：与えよ Yahweh に、彼のみ名による栄光を。供え物を携えて、彼の宮殿の庭に來い！礼拝における奉獻も大切である！

9 節：Yahweh を礼拝せよ、聖なる美において！ 全地よ、彼のみ前で恐れよ。「美」を新共同訳では「輝きに満ちる」と翻訳しているが、ここでも主なる神は威厳のある方であり、「聖なる美」として礼拝され、恐れられるように祈っている。

6. 王としての主なる神の公平な統治

10-11 節は、主なる神が王として世界を統治され (Yahwah reigns mālāk) 「ハレルヤコーラス」 He shall reign forever)、どのような不条理や理不尽なことが起ころうとも「世界は固く据えられ(確立され)、決して揺らぐことがなく、王としての主は公平に裁かれる。ここではミシュパートではなく、公正で審判を行う (dwn は支配する、政治を行う、そこから裁くの意味がある) であろうと言われている。王である主は必ず公正・公平をもって人々 (the people) を取り扱う。

7. 到来する主なる神 (13 節)

主なる神はかつて到来され (存在し)、今も到来され (現在し)、やがて來たもう。(黙示録 1:8) 神は「到来する」神である。「主は來られる、地を裁くために來られる。主は世界を正しく裁き、真実をもって諸国の民を裁かれる。詩の最後にヘブライ精神の合言葉、ミシュパート、ツェデク、アーマンが登場する。到来する神は憐れみの審判をすべく、そして、この世界に義を貫徹し、諸人民を、真実をもって裁くために來られる。以上の希望、祈りに関して信仰者は主なる神の到来を待つ者たちなのである。